芽ぐむ季節

芽ぐむ季節

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=17348815

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム

ツイッター上で唐突に始まった、ヒュンマ桜フェア便乗作品。
あいも変わらず甘いです…。
少なくとも「樫の木は、両手を広げ」や「雪に消える」の後のお話。

フォロワー様のイラストと、つぶやきにかなりのアイデアをいただきました。ありがとうございました！
イラストについては、御許可をいただきましたので、本文中に掲載させて頂いております。とても綺麗なヒュンマ作品でため息が出ます…。是非、ご覧ください。

芽ぐむ季節

　今日は気候がいいから、森に散歩に行こう、と言い出したのはマァムだった。
　体調は大丈夫なのかと心配するヒュンケルに対し、彼女は、心配いらないと笑って言って。
　どうせ森に行くのなら、獲物も獲れるといい、とどちらともなく言い出し、村の猟師に教わった仕掛けを持って、二人は森に出かけた。

　二人の住むネイル村は、周辺を深い森に囲まれており、森の恵みを享受しながら村人たちは暮らしている。
　かつては魔の森と恐れられた、迷いやすい、モンスターの住まう森は、大魔王の脅威が去った今は、かつての落ち着きを取り戻していた。
　むしろ、余所者を迷わせる広大な森は、ネイル村にとっては天然の要害であり、そこで採れる森の恵みは、村人を潤わせるものであった。森とともに生きるのが、この村の在り方である。
　ここ数日は、寒さが戻る日もあったものの、すっかり暖かくなり、小さな草花たちが森に鮮やかな彩りを添えていた。
　ヒュンケルが、ネイル村で生活するようになって、ようやく季節が一巡しようとしていた。

　ヒュンケルは、マァムに併せてゆっくりと歩きながら、春の空気を吸い込んだ。森の空気は、いつも潤いに満ちていて、草の匂いが漂う。そこに、この季節特有の花の香りがほのかに混じる。
　新しい季節の足音が、そこかしこから感じられた。
　うさぎ用の罠を仕掛け終えると、そこからは、特に目的もなくなった。二人は、気の向くままに、森を歩くことにした。

　マァムが、木の根に足を取られないように、彼女の手を取り、歩調を合わせて、ヒュンケルはゆっくりと歩いた。

気を遣いすぎよ、と笑うマァムの声が響く。
だが、ヒュンケルは、これでも足りないくらいだと反論する。
マァムは、苦笑しながらも、彼に逆らうことはせず、ヒュンケルの手に導かれるまま、ゆっくりと歩みを進めていた。
やがて、深い緑の森の中に、淡い桃色が添えられるのが視界に入った。
さまざまな種類の木が並び立つ雑木林の中に、ひときわ、多数の花を咲かせる長身の樹が見えた。
ヒュンケルの上背の倍近くあろうかというその樹は、枝という枝に、たわわに薄桃色の可憐な花々をいくつも咲かせていた。村に何本も植えられている樹の花と似ていたが、それよりもずっと小ぶりの花だった。
その色が、彼の目を引き付けた。
ヒュンケルは、驚嘆したようにつぶやいた。
「・・・これは、アーモンド・・・いや、桜、か？」
マァムも枝を見上げてうなずいた。
「そうみたいね。
これ、ヤマザクラよ。」
「ヤマザクラ？」
「うん。
葉っぱと花が一緒に出てるでしょう？それが特徴なの。
こういう自然の中にある種類の桜よね。」
それを聞いて、ヒュンケルも合点がいったように、うなずいた。
「そうか・・・カールで見た桜とは違う種類なのだな。」
マァムはヤマザクラの木を見上げたまま、嬉しそうに微笑んだ。
「ちょうど盛りみたいね。きれい。
ね、ヒュンケル、ここで少し休んでいきましょう。」
そろそろマァムを休ませた方がいいと思っていたヒュンケルに、異論のあるはずもなかった。ヒュンケルは、穏やかな笑みを浮かべてうなずいた。
「そうするか。」
その樹のすぐ近くに、ちょうど少し平らになった場所があった。ヒュンケルは、そこに、羽織っていた薄手の外套を、敷物よろしく

広げた。
「そのままじゃ、冷えるからな。」
「ありがとう。」
　マァムは、靴を脱いで、その上に上がった。
　マァムがヤマザクラの木の下に座り込むと、ヒュンケルもそれに倣った。
　二人で並んで、外套の上に腰を下ろす。
「はい、どうぞ、ヒュンケル。」
　声をかけられて、隣のマァムを見やると、いつの間にか、マァムがビスケットとお茶を差し出してきた。お茶を淹れてきた小ぶりのガラス瓶は、柔らかな春の日差しを受けて、複雑な光を反射させていた。
「ああ、ありがとう。
　マァムは飲んだのか？」
「私は後でもらうわ。」
「いや、ちゃんと飲んで、水分を補給してくれ。
　お前の方が大事にしないとならないだろう。」
「はーい。」
　マァムが先にガラス瓶に口をつけると、ようやくヒュンケルはそれを受け取った。
　さながら、ささやかなピクニックのようであった。
　森の穏やかな日差しの中、まだ少しだけ肌寒い風が吹く。喉を潤し、簡単な菓子を口にすると、二人とも、少し落ち着いた心地がした。

　地面に座ったまま、ヒュンケルは、自然とその大木を見上げた。
　太い幹からは何本もの枝が伸び、その枝の一部は、元の幹の太さが信じられないくらいの細さで、しかし、その細い枝にこそ、瑞々しさが感じられた。
　方々に枝を伸ばし、その先に、薄桃色の可憐な花の束が咲く。そして、時折吹く風が、はらはらと花弁を散らしていった。
　だが、舞い散る花びらを見ても、何故か、儚さは感じなかった。
　ヒュンケルはつぶやいた。

「不思議だな。ここの桜は、力強さを感じる。」
　マァムもヒュンケルの視線の先を追い、ヤマザクラの木を見上げた。
　薄桃色のたわわに咲き誇る花々に、緑の葉が鮮やかな彩りを添えていた。
　マァムが花を見上げる中、ヒュンケルの低い声が響いた。
「カールで見た桜は、もっと切なさを感じさせた。堤に、何本も植えてあったのにな・・・。」
「そうね・・・。」
「あのカールの桜たちは、大魔王戦で散った騎士たちの墓標だった。だからそう感じたのかもしれないが・・・あの切なく儚いと思ったカールの桜の木とは違うな・・・。
　どちらがいいというものでもないが、同じ桜なのに、この木からは命の息吹を感じる。」
　ヒュンケルの言葉に、マァムもうなずいた。
「葉っぱが出ているから、かもね。
　ほら、カールの桜って、花が全部散ってから、葉っぱが出るでしょう？」
「ああ、そうか。そこが違うのか。」
「カールの桜も素敵だけどね。
　泣いちゃうくらい綺麗だったわ・・・。」
「そうだな。」
　そうしてまた、二人でヤマザクラを見上げた。
　花の重さで少し枝の先が下がって見える。その枝が、風が吹くたびに、ゆらゆらと揺れていた。
「ヒュンケル。」
「うん？」
　花に見入っていたヒュンケルの耳に、マァムの呼び声が届いた。
　ふと、彼女を見ると、マァムは、座り直して膝をそろえていた。そして、彼女は、自分の太ももをぽん、と叩いた。
　二人にしか通じない合図だったが、ヒュンケルには、その意味はすぐに分かった。
　彼は苦笑してマァムに尋ねた。

「いいのか？」
「もちろん。」
　屈託のない笑顔だった。
　それならば、甘えてしまおうか。
　ヒュンケルは、ふとそんな気を起こした。
　ごろりと、横になり、マァムの膝に頭を乗せた。
　その彼の頭上から、マァムの声が落ちてきた。
「下から見上げると、綺麗でしょう？」
　その言葉に惹かれるように、ヒュンケルは、視線を上に向けた。
　枝に咲き誇る可憐な花々。その向こうに、澄み渡る青空が見えた。
　鮮やかな空の青と、瑞々しい葉の緑、そして、愛らしい薄桃色の花びら。互いの色が引き立てあう。
　そのコントラストが、彼から言葉を奪った。
　ヒュンケルは、嘆息した。
「・・・そうだな。」
　その彼の面を、頭上からマァムが覗き込んだ。穏やかに微笑む。
　いつか見た光景がそこにあった。
　だが、以前とは異なり、少し大人びたマァムの表情が、そして、彼女の背後を柔らかく彩る薄桃色の霞のような花々が、その光景をかつてよりも柔らかに彩っていた。
　以前、聖母だと感じたその微笑みは、いまは、いっそう身近に、温かく感じられた。
　生身の愛しい人として。
　その絵のように美しい景色の中、花々の下に芽吹く緑の葉からは、ヒュンケルは、次なる命を感じていた。
　もうすぐ花が落ちるのだろう。
　だが、花の命は葉が受け継ぎ、そして、やがて、実を結ぶ。
　ヒュンケルには、この木の知識はなかったが、近い将来の約束された姿を、今のこの木の有り様から感じ取っていた。
　ふと、ヒュンケルは頭を動かし、姿勢を変えた。
　それまで上を向いて、マァムの膝に頭を預けていたが、ほんの少し、頭を左に向けた。目の前に、マァムの腹が見える。

その彼女の腹部に、ヒュンケルはそっと手を添えた。
　すると、彼の意図を感じたマァムは、彼の手の上に、己の右手を重ねた。
　ヒュンケルはつぶやいた。
「・・・あたたかいな。」
「まだ、動かないけど・・・何か感じる？」
　マァムの言葉に、ヒュンケルはうなずいた。
「ああ・・・。そこにいる、息吹を感じる。」
　手の先に、見えない命の姿を感じていた。
　マァムがささやく。
「あなたの子だから、きっと生命力が強いのよ。」
「・・・似てほしくないところは、似ないでいいんだが・・・。」
「そこは似てていいんじゃない？」
「俺みたいな無茶はしないでほしい。」
「なら、ヒュンケルもそうしないとね。」
「・・・すまん。」
　他愛無い会話の中、ざあっと、ひときわ強い風が吹いた。
　はらはらと、花弁が舞い落ちる。
「きれいね・・・花が降っているみたい。」
　マァムが左手を天にかざした。その手に向かって、花々が降り注ぐ。
　ヒュンケルも花に視線を向けた。そして、落ちるさまに目をやる。
　軽く開いた彼の手の中にも、季節の恵みのように、花びらがふわりと降り立つ。ヒュンケルは、潰さぬように、そっと手を閉じ、その春のかけらを閉じ込めた。
　その舞い散る花びらが語るのは、散り行く儚さではなく、次なる命へとつなぐ約束の証だった。

イラスト：natsu様